



YAMAGA

近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ

008

熊本を代表する作家（一九〇三〜一九六九）

平川虎臣

ひら

かわ

こ

しん

作家平川虎臣は、戦時中の昭和一〇年代、中央文壇において華々しく活躍した。

戦争のため大変厳しい社会状況の中にもかかわらず、虎臣の小説や随筆は、次々に有名な文芸雑誌や新聞に掲載され、単行本も数多く出版された。戦争疎開で帰郷後は再び東京に戻ることができずに、不遇のまま生涯を終えた。死後は、新聞に「熊本を代表する唯一の作家」とまで賞賛する記事が掲載され、また、大学教授たちによる虎臣研究会も発足し、立派な二冊の作品集が出版された。

生い立ち

虎臣は、明治三十六年（一九〇三）十月二十五日に、菊池郡城北村黒蛭（現、山鹿市菊鹿町黒蛭）で、農業を営む黒田勝太・ミジウ夫婦の六番目の子として生まれました。しかし、虎臣が一歳の誕生日を迎える前に母ミジウが三十一歳という若さで亡くなりました。六人の子どもを抱え困っていた勝太を助けるために、勝太の姉で子どもいない平川カチ夫婦が同居することとなりました。その後、父は再婚しますが、虎臣が四歳のときに継母は死亡し、三人目の継母も虎臣が九歳のときに結婚してすぐに亡くなり、虎臣にとって母親の愛に恵まれない不幸が続きました。

そのような中、同居していた伯母平川カチ夫婦と父勝太との仲が悪くなり、そのため、伯母夫婦に溺愛され、なついていた虎臣は、父から疎まれ愛されないようになっていきました。虎臣はその頃のことを、後に「私のさびしさには涯がなかった。ほかの兄弟には話しかける父が、私にだけはどういものかひと口も口をきかないのだ。そんな父親に対し子どもがとても自発的に話しかけたりできるはずのものではない。私は恐ろしくて始終父の眼を遁れてばかり生きてきた。」と書いています。

大正五年（一九一六）の春、十二歳の虎臣は、城北尋常高等小学校を卒業し、県立鹿本中学校（旧制）に入學しますが、そのとき、自分の進学したい気持ちと直接父には言えずに、姉に頼んで父の承諾を得ています。なお、そのとき城北村から入學できたのはたった三名しかいませんでした。

しかし、虎臣は、母親の愛情も知らない上に、父からも愛されないという寂しさに耐え切れなくなりました。そのときの気持ちを後に、「如何に愛情に飢え憧れたかは、幸福に育った人のおそらく想像も及ばないところだろう」「そんな父でありながら私は

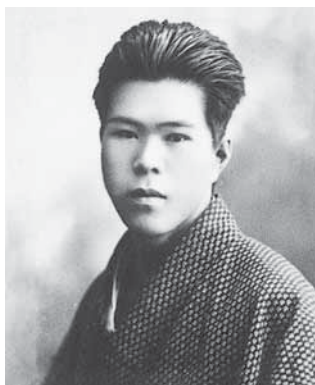
父にやはり愛されたかった」と書いています。そして、「親の愛なき子が、今更なんの学業ぞ！」と、父の愛情を得たいがために中学校を退学し、父の後について身を粉にして農作業に励みました。

作家になる夢

虎臣は、大正八年（一九一九）一月九日の日記に「文章家になりたい」と記し、十五歳のときにすでに作家になる夢を抱くようになり、正月頃から農作業の合間をみつめて懸賞応募の小説を書いています。同年四月には、菊池農蚕学校の三年編入試験に合格し、翌年三月に卒業しました。

この頃から複数の短歌会に顔を出したり、新聞や雑誌に短歌や詩をよく投稿しています。

大正十年（一九二二）一月下旬、虎臣は十七歳の若さながら短歌と詩の雑誌『地平線』を企画・主宰し、農作業の合間をみつけてはたくさんの本を読み、小説を書いています。



18才の虎臣

やがて虎臣は父の愛情を得ることになりました。同年十一月には伯母平川カチと養子縁組を行いました。

大正十一年（一九二二）十月に、二十二ページの薄い冊子ながら、虎臣にとって初めての詩集『裸像彫刻く黒田虎臣詩集』（坩堝社）を出版しました。

大正十二年（一九二三）一月下旬、虎臣は、熊本市にある九州新聞社（熊本日日新聞社の前身）に入社しました。五月には徴兵検査を受けますが、心臓の持病のため不合格となり、兵隊には行

かなくてもいいことになりました。

虎臣は、前々から満州に行きたいと考えていましたが、満州の奉天（現、中華人民共和国瀋陽市）にいる姉より「来てもいい」という連絡を受け、六月半ば九州新聞社を退職し、姉を頼って満州に渡りました。

奉天では、毎日、姉の家から図書館へ通い、読書や創作、ロシア語の勉強に励みました。七月には日記形式で書いた「満州と太陽」が九州新聞に七回連載で掲載されました。虎臣は、文学以外のことも勉強しなければと、哲学や心理学、歴史、物理学などの本もたくさん読みました。しかし、郷愁がつのり、十一月に日本へ戻りました。

大正十三年（一九二四）六月、九州新聞に「或る日の高宗皇帝」が五回連載で掲載されました。虎臣は、作家で読売新聞社の文芸部長の職にあった上司小剣に「訪ねて行ってよろしいでしょうか」と手紙を出したら、しばらくしてからうれしい返事をもらいました。虎臣は、東京に行き作家への道を目指したいと父に打ち明けました。

文芸の道を目指し東京へ

大正十三年（一九二四）、二十一歳のときに上京。講義録の出版社「大日本国民中学会」に勤めながら、小説を上司小剣に、詩を月刊誌『新進詩人』主宰者の正富汪洋に学びました。翌年第二詩集『人生の足音』（新進詩人社）を出版。大正時代末から昭和の初めにかけての約五年間の作品は、ほとんど世間の注目をあびることはなく、苦難の日々が続きました。この時期から、作品名に「平川虎臣」の名前を使うようになりました。

昭和五年（一九三〇）、これが最後の挑戦との覚悟で応募した小説「赤い機関」が、総合雑誌『改造』四月号の懸賞創作の選

外佳作に選ばれました。この作品で反響がなかったら作家になることをあきらめようと思っていた虎臣は、非常に喜び、作家への道であらためて目指しました。

昭和七年（一九三二）、第三詩集『涙多き人生』（文憲堂書店）を出版しました。

昭和八年（一九三三）、虎臣は、郷里黒蛙のいとこ黒田京子が、菊池高等女学校を卒業するのを待って結婚し、東京の田端に新居を構えました。虎臣三十歳、京子十八歳でした。

ちょっとコラム

●大正時代の世相

明治後期から大正時代にかけて、市民社会ができ自由主義とデモクラシーの風潮がひろがりました。第一次世界大戦景気は終戦とともに終息し、米騒動、銀行、企業の倒産と最悪の世相となりました。



米騒動

川端康成が絶賛

昭和九年（一九三三）七月、総合雑誌『中央公論』の臨時増刊新人号の懸賞小説に応募した「生き甲斐の問題」が、見事入選します。また、同月、別の総合雑誌『改造』の懸賞小説には、隣の内田村（現、山鹿市菊鹿町上内田）出身の酒井龍輔の「油麻藤の花」（アイラトビカズラの別名）が、石川達三らを押しえて見事入選しました。その年まではまだ芥川賞が創設されておらず、当時の権威ある総合雑誌に虎臣と龍輔が入選したことは、今日でいえば、芥川賞作家がこの山鹿市菊鹿町から同時に二人現れたことと同じで、大変素晴らしいことだといえます。

昭和十一年（一九三六）、虎臣が主宰者となって同人雑誌『日本記録』を創刊。小説「砂」を発表し、注目を受けます。

昭和十三年（一九三八）、虎臣三十五歳のときに『中央公論』に発表した小説「手紙」は、かの有名な川端康成が東京朝日新聞の文芸時評に取り上げ、「人情の美しく高まった文章である。人情深さが素直にあふれて、この作品はよい」とほめたたえました。

十二月に文芸雑誌『新潮』に発表した小説「花」は、多くの批評家に注目され、それぞれに高い評価を得ました。

これによって、虎臣の作家としての力量が広く認められることとなりました。

しかし、虎臣は、小説がやっと認められるようになったのに、



「新潮」の目次

生活環境は不幸に見舞われ、勤めていた出版社が倒産し、妻京子は病に倒れてしまいました。虎臣は、毎日、幼い二人の子どもの面倒をみながら妻の看病に努めました。しかし、看病の甲斐なく、十四年九月、妻京子は二十四歳という若さで、幼い二人の子（花江四歳、謙之介二歳）を残し、息を引き取りました。

中央文壇での活躍

虎臣の代表作となる長編小説「神々の愛」は、妻の看病と子ども世話で大変な時期に、原稿を書く場所や時間の確保に苦労しながら執筆したものです。

この「神々の愛」は、十四年三月『新潮』に一挙掲載され、多くの文芸評論家により高い評価を受けました。そして、この作品は、堀辰雄や太宰治、石川達三らの作品と共に「新選純文学叢書」に選ばれ、単行本となって出版されました。これにより虎臣は、中央文壇における地位を確かなものとししました。

なお、この作品は戦時下の検閲制度のため、『新潮』に掲載されたときには多くの箇所が削られ、虎臣は、後に「雑誌を見ると滅茶々に削られている。原稿用紙にして二〜三十枚は削られていた。そして、単行本になるときは「なるべく伏字にならぬよう訂正した。それでも十五枚ばかりはどうにもならず、匙を投げた」とのべ、さらに「いつの日か改訂版を出したい」と強く思っていました。

戦争が激しくなるにつれて、物資統制による紙不足で雑誌等の発行も大変厳しい時代になりますが、虎臣の作品は次々に雑誌に掲載されていきます。

特に、文学好きの若者たちに人気があった文芸雑誌『若草』には、虎臣の小説「街にいる鷺」が六回連載で掲載されます。この雑誌には、井伏鱒二、上林暁、尾崎一雄、太宰治らの作品も掲

ちょっとコラム

●戦争中の世相

～学童疎開～

学童疎開とは、第二次世界大戦末期においてアメリカ軍による本土爆撃に備え、大都市の国民学校初等科学童をより安全な地域に一時移住させたことをいいます。

●疎開船「対馬丸」の悲劇

昭和19年（1944）8月21日、沖縄から九州に向かった学童疎開船「対馬丸」は、翌日、8月22日アメリカ軍の潜水艦の魚雷攻撃により撃沈されました。1661人の乗員のうち、1484人が一瞬にして犠牲となり、助かったのはわずか177人でした。学童は767人が亡くなり、助かったのは59人だけという悲劇でした。

載されていますが、目次のところには虎臣の連載小説「街に在る鷺」が、赤地に白字の枠囲みで特別扱いとなっています。

昭和十六年（一九四一）三月、新進作家として活躍していた虎臣は、東京池袋の小学校の教師をしていた吉田サキ子と再婚し、郷里に預けていた花江と謹之介を迎え、幸せな家庭生活を始めました。

厳しい出版状況の中にもかかわらず、虎臣の作品は単行本として、『愛情浪漫』『花と門』

『街に在る鷺』『生命歌』『生き甲斐』『西方の忠臣』『野の太陽』『吹き過ぐる風』などが次々に出版され、戦時下の中央文壇において華々しい活躍を続けました。



虎臣の単行本

故郷へ疎開

昭和十九年（一九四四）、東京がアメリカ軍の空襲を受けるようになり、子どもたちの「縁故疎開」が始まり、健康を害していた虎臣は、三月初め、花江と謹之介を連れて郷里の黒蛭に疎開しました。七月末には小学校の教師をしていたサキ子も東京から引き揚げてきて、九月から隣村の内田小学校（現、山鹿市立内田小学校）に勤めることになり、学校の近くに家族全員で転居しました。翌年四月から虎臣も内田村役場に勤めますが、急性肋膜炎になり、二十日間の絶対安静で生死の境をさまよいました。

戦争が終わった翌年の昭和二十一年（一九四六）、サキ子が城北小学校に転勤となり、家族全員で黒蛭の自家の蔵に引越し、その翌年には次女菊世が誕生しました。

虎臣は、健康が回復したらすぐにも東京へ行き、作家活動を続けるつもりでいました。しかし、健康が回復しないことや、家族一緒に上京し生活できる状況が整わないことなどの理由により、やむなくそのまま狭い改造した蔵で生活を続けました。

創作活動の再開

故郷に帰ってからの虎臣は、「時流に合わない」と全く小説を書こうとせず、昭和二十六年までペンを執りませんでした。その後、創作活動を再開し、昭和二十八年（一九五三）、同人雑誌「文学無限」の創刊号に小説「鬪鶏」を発表しました。昭和三十年（一九五五）から三十二年（一九五七）にかけて長編小説「野生の流れ」を『文学無限』に連載発表し、その後も精力的に創作活動に励み、「野床人」、「日は沈む」、「やんぼし」、「抵抗は自然に来る」、「犠牲者伝」、「石喧嘩した二人の農婦」等を次々に同人雑



黒蛭の家(現在)



誌に発表しました。

昭和四十一年(一九六六)十一月には、武蔵野美術大学を卒業後、東映映画会社に就職し「狼少年ケン」などのアニメ映画を描き、活躍していた長男謹之介が結婚しました。長女花江も翌年三月に結婚し、次女菊世も東京の音楽大学に進学していました。虎臣はこれがいよいよサキ子と共に故郷を離れ上京し、前のように東京で作家活動ができると思っていました。

しかし、思いもよらないことに、謹之介が四十二年七月に心不全のため急死しました。虎臣は、大きなショックを受け「これで東京へも行かれないなあ」とすっかり気落ちしました。それから体調を崩し、胃ガンと闘いながら、昭和四十四年(一九六九)五月二日黒蛭の自宅で永眠しました。(享年満六十五歳)

同人雑誌『文芸復興』や文芸雑誌『日本談義』等では虎臣の死を悼む特集が編集され、文芸雑誌『民主文学』には、芥川賞作家の桜田常久が虎臣を悼む文を書いています。

虎臣研究会の発足

昭和五十三年(一九七八)一月、森本忠が、『熊本日日新聞』の「熊本文・芸叢苑」に「隠れた芸術家たち(二)」で、虎臣について詳しく紹介し、「熊本のみ」の代表作家といってもいい彼ほどの力量のある作家が、なぜに顧みられないのか」と嘆いています。

五十五年(一九八〇)八月に、熊本女子大の木村一信助教授が「熊本日日新聞」の「肥後の本・再見(十三)」で、虎臣の代表作「神々の愛」を取り上げ賞賛しました。それを読んだ妻サキ子が、木村助教授にお礼の手紙を出し、虎臣の本や直筆原稿などがあることも伝えました。翌年、木村助教授は、黒蛭の虎臣の家を訪れ、虎臣の著書や作品掲載雑誌、創作ノート、原稿、川端康成や島崎藤村などからのハガキなど貴重な資料がたくさん保存されていることを知りました。

木村助教授は、熊本大学の中村青史教授や大学生の沢田博とともに資料の整理に着手し、虎臣文学の素晴らしさを知り、もっと深く研究していこうということになりました。

昭和五十七年(一九八二)六月、木村一信助教授、中村青史教授を中心に小学校・中学校・高校の教師や地元菊鹿町役場職員ら十名で、「平川虎臣研究会」が発足しました。

虎臣文学の再評価

研究会は毎月一回開催され、研究会通信が発行されるとともに、各会員がそれぞれに新聞や会報誌等に虎臣のことを発表し、研究会を重ねるうちに虎臣の作品集を作ろうということになりました。

昭和五十九年(一九八四)六月に、虎臣の代表作といわれる



たたむすむ虎臣

「手紙」や「神々の愛」等が収録されている『平川虎臣作品集』が出版されました。

虎臣研究会の活動等により、県内においても虎臣が認められるようになり、昭和六十年（一九八五）十月に熊本市に完成した「県立熊本近代文学館」には、平川虎臣コーナーが設けられました。六十二年（一九八七）には、高等学校用人権同和教育啓発副読本『きずな』に小説「乳房」が掲載され、また、同年春には季刊誌『銀花』の編集長細井富貴子が東京から取材に訪れ、『銀花夏号』に「寂寥の沼々平川虎臣」と題して発表。九月には菊鹿町公民館の落成記念事業として「平川虎臣展」が町役場職員有志によって開催され、十月末には県立第二高校の図書館祭で「平川虎臣展」が開かれました。

平成三年（一九九一）四月には、虎臣研究会編集による『平川虎臣戦後小説集』が出版されました。七月には、菊鹿町教育委員会主催により平川虎臣第二作品集出版記念の「文化講演会&資料展」が、菊鹿町公民館で開催されました。

平成四年（一九九二）九月十二日、虎臣の妻サキ子が、急性白血病により息を引き取りました。（享年八十四歳）

サキ子は、戦争末期の空襲を受ける東京で、一人で虎臣の本や原稿、掲載雑誌などたくさん貴重な資料類を荷造りし、貨物列車で郷里黒蛭まで送り届けました。戦後は全く原稿料が入らず無収入になった虎臣に対し、一言も不平不満を言わずに、創作に打ち込めるように献身的に支えていました。虎臣が亡くなっても、二階の部屋いっぱい虎臣関係資料を大事に保管し、研究会ができるきっかけを作りました。研究会ができてからは、会員一人ひとりの心よりどころとなり、会の活動を陰になって支え、遂に夫虎臣の作品をまとめた戦前と戦後の作品集を出版することができました。

凛とした気品と誰でも包み込む優しさを持つ美しい女性であったサキ子夫人。その人に愛された平川虎臣。彼ほど幸せな作家はいないのではないのでしょうか。「不遇な作家」といわれていますが、虎臣の作品は今確かに新しく作品集として世に出され、それによって彼の作家としての力量があらためて認められてきています。

「平川虎臣」の名前は、富士山ろくに建つ「文学者の墓」に、彼の代表作の「神々の愛」とともに残されています。



文学者の墓

年表 History

明治三十六年 (一九〇三)	▼	池田郡城北村黒蛭(現・山鹿市菊鹿町黒蛭)にて、農業を営む黒田勝太の六番目の末っ子として出生
大正五年 (一九一六)	▼	城北尋常高等小学校を卒業し、熊本県立鹿本中学校(旧制)に入学
大正七年 (一九一八)	▼	県立鹿本中学校を中退し、農業に就く
大正十一年 (一九二二)	▼	最初の詩集「裸像彫刻 黒田虎臣詩集」を出版
大正十二年 (一九二三)	▼	九州新聞(熊本日日新聞の前身)に日記形式で書いた「満州と太陽」が七回連載で掲載される
大正十三年 (一九二四)	▼	上京。講義録の出版社「大日本国民中学会」に就職し、小説を上司小剣に、詩を正富汪洋に師事
大正十四年 (一九二五)	▼	第二冊目の詩集『人生の足音』(新進詩人社)を出版
昭和五年 (一九三〇)	▼	文芸雑誌「改造」の懸賞小説に応募した「赤い機関」が選外佳作に入る
昭和八年 (一九三三)	▼	郷里黒蛭のいとこ黒田京子と結婚
昭和九年 (一九三四)	▼	「中央公論」が募集した懸賞小説に、「生き甲斐の問題」が入選し、七月の臨時増刊新人号に掲載され、文壇にデビュー
昭和十三年 (一九三八)	▼	文芸雑誌「中央公論」に発表した小説「手紙を川端康成が絶賛。また小説「花」も多くの文芸評論家が高く評価
昭和十四年 (一九三九)	▼	長編小説「神々の愛」が文芸雑誌「新潮」に一挙掲載され高い評価を得、新選純文学叢書の一冊に選ばれる
昭和十六年 (一九四一)	▼	妻京子が病気のため死亡(享年二四歳) 小学校の教師をしていた吉田サキ子と再婚
昭和十六年 (一九四一)	▼	「花と門」「生き甲斐」「野の太陽」など単行本が次々に出版される
昭和十九年 (一九四四)	▼	健康を害し、学童の縁故疎開のため二人の子どもを連れて黒蛭に帰る
昭和二十年 (一九四五)	▼	急性肋膜炎を患い、生死の境をさまよう重体になる
昭和二十八年 (一九五三)	▼	創作活動を復活し、同人雑誌「文学無限」の創刊号に小説「鬮鶏」を発表
昭和三十年 (一九五五)	▼	小説「野性の流れ」を三年間にわたり「文学無限」に連載。「野床人」「日は沈む」「抵抗は自然に來る」「犠牲者伝」等の小説を同人雑誌に発表
昭和四四年 (一九六九)	▼	五月二日、胃がんのため死去(享年六五歳)
昭和五七年 (一九八二)	▼	熊本大学教授らを中心に「平川虎臣研究会」が発足
昭和六十年 (一九八五)	▼	熊本市に完成した「県立熊本近代文学館」に虎臣の常設展示コーナーが設けられる
平成四年 (一九九二)	▼	九月十二日、虎臣を支え虎臣文学の再評価のために献身的に頑張ってきた妻サキ子が急性白血病により死去(享年八四歳)

参考文献・ご協力頂いた方(敬称略)
平川虎臣研究会 平川虎臣作品集
中山秀人(鹿本町)
平川菊世(山鹿市)

平川虎臣は、平成20年から再び注目されるようになり、熊本日日新聞の「近代肥後異風者」(第72話)(8月27日)で、紙面の3分の2ページを割いて詳しく紹介され、翌21年の2月~3月には熊本日日新聞夕刊の子どもむけ世界の名作シリーズのコーナーで、18回連載で5つの短編小説がカラー挿絵つきで掲載されました。

近代の山鹿を築いた人たち 008

熊本を代表する作家 平川 虎臣

平成21年3月発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田2085(博物館内)
TEL 0968-43-1691

編集委員

岩井賢太(菊鹿分室教育課) 田口 実(六郷小学校)
角田 淳(社会教育課) 原田 勇(文化課)